

更なる事故率低減を目指して

～徹底した牛舎の衛生管理を～

●消毒の効果と使用する薬剤の例

本誌102号※1に掲載したJAからつキャトルステーションでは、徹底した衛生管理により事故率を約1.5%に抑えている。

具体的には牛の出荷後、次の導入に向け牛房を約2週間かけて洗浄している。当農場では壁や柱、固形塩のケースまで洗浄・消毒を実施し、最終的には石灰塗布を行っている。これらのことを行うことで、一般生菌数が大幅に減少し、事故率の低減につながっている(図)。

消毒剤の効力を最大限発揮させるためには、病原体や消毒場所に適した消毒剤を用い、説明書に従った濃度で正しく使用する必要がある。同時に、消毒剤にはさまざまな種類があり、特性を理解して使用していただきたい(表)。

通常用いる消毒剤は、逆性石鹼(ロンテクトの500倍～2,000倍希釈液)を、ロタウイルス感染症が

本誌では、子牛の事故率を低減させるため、これまでも衛生管理の重要性をお伝えしてきた。今回は、さらなる事故率の低減につながるよう、2回にわたって「牛舎の消毒方法」について紹介する。

疑われる場合には、グルタルアルデヒド製剤(エクスカット25%、SFLの200～1,000倍希釈液)、または塩素系消毒剤を使う。コクシジウム感染症が疑われる場合は、オルソ剤(オーチストンの100～300倍希釈液)を使用する。更に石灰乳塗布ができない場合は、消毒薬を全面に散布する。

●日常で行う消毒の注意点

①牛舎の出入り口・通路

出入り口には踏み込み消毒槽を設置し、消毒液は適正な濃度に希釈。汚れたら交換を行う。冬場に凍結する場合には、消石灰を代わりにしておく(写真1)。通路には通年で消石灰を散布する。

②牛舎全体の消毒

動力噴霧機などを用いながら、定期的に牛舎内を逆性石鹼で消毒する。また、作業時はゴーグル、マスク等の保護具の着用を心がける(写真2、3)。

③水槽

水をくみ出して、ブラシでこすりながら洗浄する。その後、逆性石鹼(ロンテクトの500倍～2,000倍希釈液、以下同じ)を散布して消毒を行う。また、ウォーターカップは押しペラの裏も、フロート式水槽はカバーを外して、フロート部分も念入りに洗浄する。

④飼槽

給餌する前に残った飼料を捨て、糞便などの汚れを取り除いた後、逆性石鹼を散布して消毒する。特に、水槽付近の水をかぶりやすい

場所は念入りに行う。

⑤牛がなめたり顔をこすりつけやすい場所(柵や壁など)

逆性石鹼を散布して消毒するのが望ましい。

⑥肺炎が発生した場合

逆性石鹼(ロンテクトの1,000倍～2,000倍希釈液)を動力噴霧機で牛舎全体に噴霧。ただし、牛体

が濡れると牛が消耗しやすくなるので、寒い時期は注意しながら行うこと。

●素牛の導入・移動時

どのような病原体を持っているのかを把握するのが難しい。特に家畜市場から導入する牛に関しては、異なる農場から導入すること

もあるため、どのような状況で育てられたか把握するのが困難である。そのため、導入する際には逆性石鹼(ロンテクトの1,000倍～2,000倍希釈液)で、牛体の噴霧消毒を行うことが望ましい。※2

次号では、オールインオールアウト時の牛舎消毒の手順についてご紹介する。

表. さまざまな消毒剤の種類と特性

消毒剤の種類	商品一例	ウイルスエンベロープ		主な使用用途				消毒効果			金属の腐食	
		有	無	畜舎	車両	牛体	ウジ	細菌	コクシジウム	真菌		有機物
		RS, IBR, BVD等	口蹄疫, ロタ									
塩素剤	クレンテ	○	○	○	○	-	-	○	×	○	半減	○(普通)
	スミクロール											
	アンテックビルコンS											
	ワイブアウト											
オルソ剤	オーチストン	○	×	○	-	-	○	○	○	○	若干減少	○(弱)
	逆性石鹼	○	×	○	○	○	○	○	×	×	減少	なし
ヨウ素剤	動物用ヨーチン	○	○	○	-	○	-	○	×	○	減少	○(強)
	バイオシッド											
	グリーンナップA											
	ファインホール											
	イソジン											
アルデヒド	エクスカット	○	○	○	○	-	-	○	不明	○	著しい減少	○(弱)
	グルタクリン											
	グルター-Z											
	ヘルミン											
アルコール	-	○	×	○	○	○	○	○	×	○	減少	なし

※RS(牛RSウイルス)、IBR(牛ヘルペスウイルス1型)、BVD(牛ウイルス性下痢)
消毒剤によっては、休業期間が必要な薬剤もあります。各消毒剤の使用については、取扱説明書をよく読み、用法・用量を守り正しくお使いください

図.石灰塗布による一般細菌数の変化

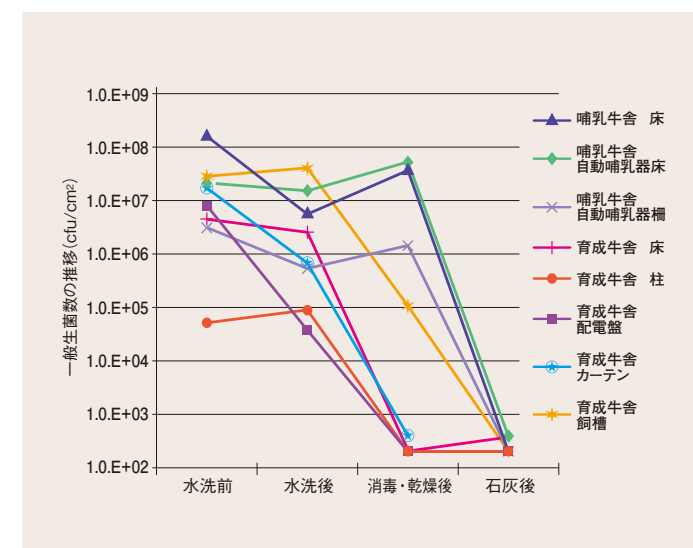


写真1. 消毒槽



写真2. 牛舎内消毒(スピードスプレーヤーを使用)



写真3. 牛舎内消毒(自動噴霧装置を使用)



※1 ちくさんクラブ21(102号)6～7ページを参照。CASE STUDY「衛生管理の徹底を目指す 子牛事故低減(JAからつキャトルステーション)」

※2 病原体の把握には本誌22ページのDNAチップ法も参考にしてほしい